

『イラン現代史： イスラーム革命から核問題、対イスラエル戦争まで』

黒田賢治* 著、中公新書、2025 年

松永 泰行†

本書は、1979 年のイラン・イスラーム革命後に登場したイラン・イスラーム共和国の時期に焦点をあて、イランの現代史を詳説した一般向けの書籍である。出版されたのが、2025 年 11 月で、同年 6 月のイスラエル・アメリカによる対イラン攻撃から数か月後であったこともあり、副題が「イスラーム革命から核問題、対イスラエル戦争まで」とされている。このため、近年の国際政治的な問題の議論に限定した本であるとの印象を与えるかもしれないが、実際には、20 世紀初頭のガージャール朝末期の状況を枕にし、1925 年のパフラヴィー王朝の成立から叙述を始めている。もちろん、250 頁近い本論の 5 分の 4 は、1979 年 2 月 10 日以降のイスラーム革命成就後の時期に注がれている。

著者の黒田氏は、中東地域研究・文化人類学をフィールドとし、イランのコム（イスラム教シーア派の国内最大のマドラサを持つ聖廟都市）を中心とした宗教界の諸相を人類学的な現地調査に基づき調査をしたことで知られる堅実な研究者である。2011 年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した博士論文では、「現代イランにおけるイスラーム国家と法学界の研究：イスラーム指導体制下の宗教と政治をめぐって」というタイトルで、コムの（アラビア語・ペルシア語では、hawza や houze と呼ばれる）12 イマーム・シーア派宗教界における日常的な諸相を、イスラーム法学者の支配を国是とする宗教的な権威主義体制という大きな枠づけの中で分析をした。ちなみに、評者が米国留学中に指導を受けたイラン系アメリカ人およびその他のイラン専門の教授たち（Shahrough Akhavi, Michael Fischer 等）が、最後にコムなどのイランの宗教界でフィールド調査を行ったのが 1970 年半ばから 1978 年までの時期であった。その後、1979 年のイスラーム革命、1980 年から 1988 年までのイラン・イラク戦争などで、欧米の研究者がイランに立ち入れなくなり途切れていた人類学・政治学系のマドラサ・宗教界の調査を、2000 年代に再開したのが黒田氏の博士論文の研究であった。黒田氏は、上記の業績以外に、『戦争の記憶と国家：帰還兵が見た殉教と忘却の現代イラン』（世界思想社、2021 年）という、イラン・イラク戦争に従軍した一兵士の視点からその経験を物語る著作を日本語で提供する仕事もしている。

本書の第 1 章では、1979 年 2 月の革命の成就から 1980 年 9 月のイラン・イラク戦争勃発までを「ホメイニー体制と革命勢力の角逐」として、第 2 章ではイラン・イラク戦争の勃発から 1988 年 8 月の

* 国立民族学博物館グローバル現象研究部 准教授

† 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

matsunaga@tufs.ac.jp

停戦および1989年6月の初代最高指導者（国家元首）であったアーヤトッラー・ホメイニー師の死去までを「イラン・イラク戦争とイスラーム共和体制」として、第3章ではアリー・ハーメネイー師の第2代最高指導者就任およびその直後の憲法改正から2005年に改革派と謳われたハータミー政権が退陣するまでを「ハーメネイー体制と政治的自由」として、第4章では2005年のアフマディーネジャード政権の登場から核問題をめぐって国連安保理制裁が科され国内経済状況が厳しくなった2012年頃までを「新保守派の台頭と『緑の運動』」として扱っている。そして第5章では2013年から2021までのロウハーニー政権期に焦点を当てながら、アフマディーネジャード政権に顕在化した革命防衛隊の経済分野ほかへの進出、またハータミー政権期にその存在が明らかになったイランの核計画をめぐる国際的軋轢、2015年に合意が実現した包括的共同行動計画（いわゆるイラン核合意）とその失墜およびアメリカの経済制裁の復活からコロナ期までを「防衛戦略と核問題」として、終章では2021年から2024年までのライシー政権とその後続のペゼシュキヤーン政権の時期を、2022年9月に勃発した「女性・生活・自由」抗議運動を含め「暗雲垂れ込めるイスラーム共和国体制の未来」として扱っている。終章の最後は、イスラーム共和体制は存続するかという問いとその問いに答えることの難しさの指摘で締めくくっている。また全体を通して、食べ物やスポーツなどのソフトなトピックに関するコラムが章の間に散りばめられ、工夫がこらされている。

本書は大変情報量が多いながらも、気軽に手に取れる新書版であり、2025年6月および2026年2月以降のイランへの軍事攻撃とその結果として経済面を中心に国際的に引き起こされている不安定な情勢を踏まえると、多くの読者のニーズに答えることができるタイムリーな出版物といえるであろう。欲をいえば、起こった結果だけでなく、起こりえた別の展開をも包含した、著者の史的洞察が行間から読み取れる叙述であれば、よりよかったとも思われる。しかしこの点は、一般向けの新書版という形態を踏まえると、大きな問題ではもちろんない。実力のある研究者であるため、次の著作で十分に読み応えのある秀作を世に問うてくれるものと期待をしている。